

大切な遺産

絵本になった「おじちゃんせんせい!! だいだいだいすき」は実在の人物です。今の時代に欠けて、深く求められている「こころ」の問題を大切に行っている埼玉の田舎の保育園で、創立者の理念を全身で受け継ぎ、実行した職員、子ども達から慕われたおじちゃんの実話です。

本当に一番大切なものって心の目でしかみえないけど、おじちゃんはいつも心の目で園児の一人一人を全身で受け入れ、受け止め、寄り添って「そうか、ウン泣きたいよね、泣いてもいいんだよ」と膝の上に乗せて気が済む迄子どもの心と共にいて、おもむろに絵本やブロックで遊んで「もういいか？」と今度は膝の空くのを待ち兼ねている子どもとつき合っていた。特別みんなに迷惑をかける子の時は、おんぶして田んぼ道を散歩して。

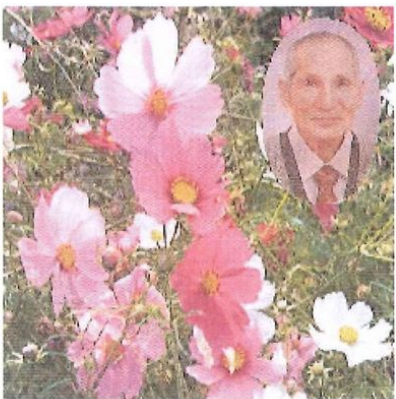
みんなおじちゃんの膝や脊が心の充電基地だった。そんな十五年は本人にとっても最高に幸せを感じる日々でした。いつも保育園の為に、創立者の姉の為に、子どもを愛し抜くことが自分の喜びであった。

早朝や、いつ迄もお迎えに来てもらえない子、事情があって満たされていない子、自己主張が強すぎて友達や親とうまく関われない性格の子、泣く事や悪い子を演じる表現しか出来ない乳幼児の心の底がみえて、躰とか、言い聞かせとは違って、心から子どもに寄り添いながら聞いて、待って、わかってあげていた。

保育士でも園長でもなく用務の職員である立場で園のありとあらゆるすき間を埋めながら、わけへだてなく人を愛し、園の存在につながる事には時として身を捨てて抗議した。

そして創立50周年の時、七十才で大きな遺産を残して天国へと旅立ったあと、子ども達には心の中に一生忘れられない温かいものを残し、園の為には信念と誇りを守り、食育農園を確保し、創立者の念願、保育理念を庭に託したいと「夢の庭へ」と管理棟を引き揚げ「森へ続く庭」を残した。

一年経っても毎日誰かれなく遺影の前に花や食物がとどけられ、学校帰りに手を合わせる小学生、中学高校生がポロポロ泣きながら小さかった頃の思い出にひたり、とりとめもなく涙し「また来ます」と去って行く。しっかりと感謝の心、どんな事があっても生きる勇気を育ててくれたのだと思える。愛が乳幼児期にどれ程大切かを教えてくれている。



水一滴、ひと口の食べ物も入らない何か月もの日々も「子どもの声を聞きたいから」と最期になる十日前迄子どもの声の聞こえる部屋で過ごした。死んでも尚、皆の心の中に生き続ける確かな証と奇跡とを深めているおじちゃんせんせいがいた事を絵本の中で感じて頂ける事を祈っています。